

石岡 久佳¹⁾ 中内佳奈子¹⁾ 邊見宗一郎¹⁾ 田村 哲也¹⁾
 岡 博文¹⁾ 三宅 一¹⁾ 佐藤 浩一²⁾ 花岡 真実²⁾

1) 徳島赤十字病院 脳神経外科

2) 徳島赤十字病院 血管内治療科

要 旨

2008年の当院脳神経外科入院患者数は855例で、脳血管障害患者は627例（脳梗塞：378例，脳内出血：127例，くも膜下出血・脳動脈瘤：113例，動静脈奇形・瘻：9例）であった。この中で、脳内出血127症例における背景調査を施行した。平均年齢は73歳（36-98歳）で、男性77名（61%），女性50名（39%）であった。既往歴として心疾患は21%，糖尿病は20%で、本人あるいは（主要な）家人に高血圧既往の認識がある症例は63%であった。また、脳血管障害の既往歴としては、脳出血（つまり再発）が13%，脳梗塞が16%であった。

この127例で、脳内出血発症時における抗血栓薬の服用について調査すると、抗血小板薬あるいは抗凝固薬を、少なくとも1剤以上服用している患者は全体の21%であった。内訳は、抗血小板薬単剤が16%，2剤併用が1%，3剤併用が1%であった。また、抗凝固薬の服用は4%で、抗凝固薬と抗血小板薬の併用は2%であった。抗血小板薬を内服していた25例と、抗凝固薬や抗血小板薬を内服していない100例について、出血部位，サイズ，転帰等について比較検討を行い，若干の文献的考察を加えて報告する。

キーワード：脳出血，抗血小板薬，抗凝固薬

緒 言

脳梗塞後，心筋梗塞後の2次予防のために抗凝固薬や抗血小板薬の投与が行われるが，これらの薬剤により出血のリスクが高まりうる。

2008年の当院脳神経外科入院患者数は855例で，脳血管障害患者は627例（脳梗塞：378例，脳内出血：127例，くも膜下出血・脳動脈瘤：113例，動静脈奇形・瘻：9例）であった。この中で，脳内出血127症例における背景調査を施行した。

対 象

2008年に当院救急外来を受診し，脳内出血と診断された症例のうち，入院治療を必要とした新規入院患者127名を対象とした。対象の平均年齢は73歳（36-98歳）であった。男女比は男性77名（61%），女性50名（39%）であった。

方 法

対象について，既往歴・嗜好歴，出血部位，出血巣のサイズ，来院時血圧，抗血栓薬の服用，転帰について調査し比較検討した。また，Barthel INDEX, modified Rankin Scaleを用いて機能予後評価も行った。同様に比較検討した。

結 果

既往歴については，心疾患21%，糖尿病20%，肝疾患10%，透析導入4%，本人もしくは家族への問診で高血圧の既往ありが63%であった。脳血管障害の既往は脳梗塞16%，脳出血13%，嗜好としては飲酒43%，喫煙38%という結果だった。出血部位については，視床37%，被殻25%，皮質下19%，小脳11%，脳幹5%，その他3%で，視床出血と被殻出血を合わせると約6割であった。出血巣のサイズは，2 cm以下が8%，2 - 4 cmが56%，4 - 6 cmが22%，6 - 8 cmが13%，

8 cm 以上が2%であり、半数以上が2～4 cm のものであった。来院時の収縮期血圧は、119mmHg 以下が2%、120-139mmHg が8%、140-159mmHg が24%、160-179mmHg が23%、180-199mmHg が15%、200-219mmHg が17%、220mmHg 以上が11%と、45%の症例で180mmHg を超えていた(図1)。退院時機能評価は、Bathel INDEXとmodified Rankin Scale (mRS) の2つで行った。Bathel INDEXでは、0点が46人、5-20点が20人、25-45点が8人、50-75点が4人、80-98点が15人で100点が6人で、約6割の症例で20点以下であった。また、mRSは、0-1点が9人、2点が7人、3点が5人、4点が23人、5点が40人、6点が17人と、約8割が4点以上で機能予後は不良だった。転帰は、転院が65%、自宅退院が18%、死亡が17%で、大半の患者は転院でのリハビリ治療の継続を必要とした。

これらの症例で抗血栓薬を服用していたのは、全体で27例(21%)であった。抗血小板薬は単剤20例、2剤・3剤は各1例、抗凝固薬単剤は2例、両者の併用は3例だった。抗血小板薬の内訳は、アスピリン19例、塩酸チクロピジン4例、ジピリダモール2例、シロスタゾール1例、クロピドグレル1例、イコサペント酸エチル1例であった。そこで、抗血小板薬を服用していた25例ををAP群とし、していなかった102例をND群として比較検討を行った。まず、出血部位についてはND群では視床35%、被殻23%、皮質下22%、小脳

10%、脳幹6%、その他4%であった。AP群では視床44%、被殻32%、皮質下8%、小脳12%、脳幹4%で、ND群と比べAP群では視床出血が多く、皮質下出血が少ない傾向が認められた。出血巣のサイズは、ND群で2cm以下7%、2-4cmが56%、4-6cmが25%、6-8cmが11%、8cm以上が1%だった。AP群では2cm以下が8%、2-4cmが56%、4-6cmが12%、6-8cmが20%、8cm以上が4%と、顕著ではないがAP群の方がサイズが大きい傾向にあった。転帰は、ND群で転院67%、自宅退院17%、死亡16%、AP群は転院56%、自宅退院24%、死亡20%であり、AP群では自宅退院も多いが死亡例も多いという結果だった(図2)。機能予後については、mRSを2群で比較検討した。ND群では0-1点が8人、2点が8人、3点が3人、4点が25人、5点が40人、6点が16人だった。AP群が0-1点2人、2点1人、3点3人、4点4人、5点10人、6点5人であり、死亡率及び重症率はAP群に多い傾向にあった。

考 察

豊田らによると脳出血患者の8%が抗凝固薬服用患者で、21%が抗血小板薬服用患者、2.5%が両服用者であり、入院後24時間後のCTで血腫量が増大していた患者では、抗血小板薬を服用していた患者が有意に多いという結果だった¹⁾。我々の症例でも脳出血患者の20%程度が抗血小板薬服用患者であり、ほぼ同様の

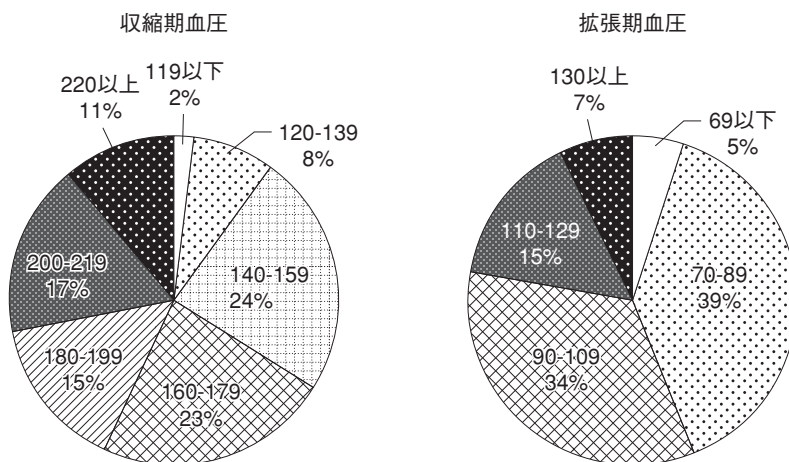


図1 来院時血圧

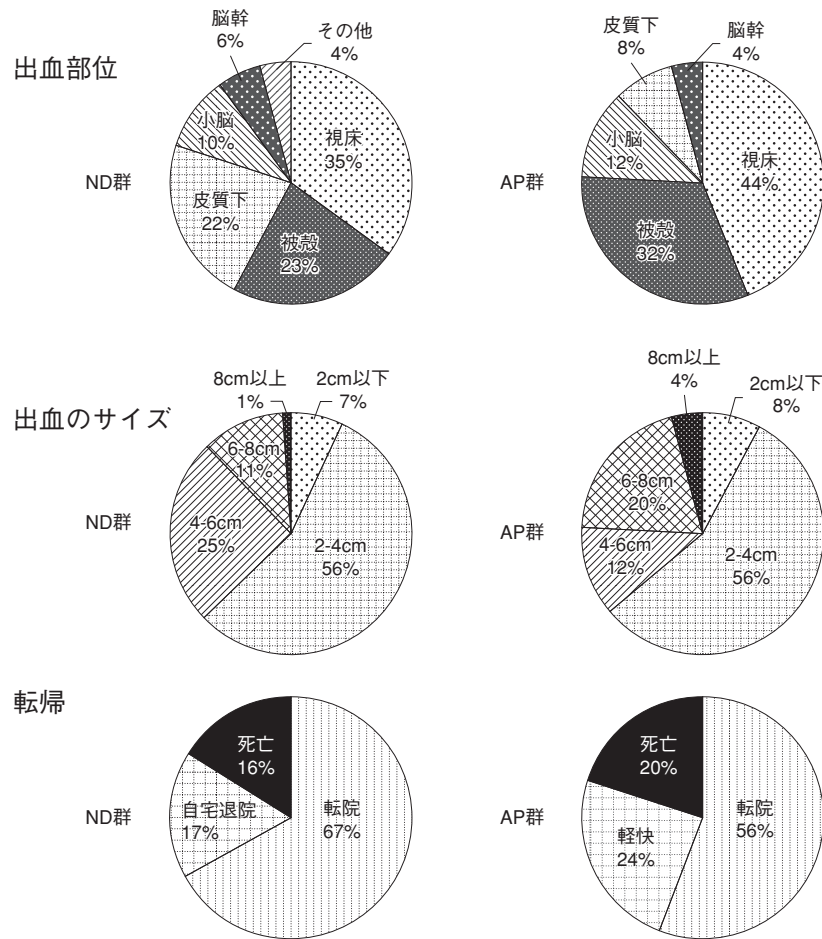


図2 AP群, ND群の各結果

結果であった。BAT Studyによると頭蓋内出血の年間頻度は抗血小板薬単独群で0.37%，併用群で0.8%，抗凝固薬投与群で0.83%，両者併用群で1.36%であり，この結果からはこれらの薬剤と頭蓋内出血との関連は薄いように思われるが，豊田らの報告及び今回の調査結果からは抗血栓薬と頭蓋内出血とに関連が疑われる²⁾。来院時の血圧あるいは持参薬から考えて，患者のほぼ100%が高血圧症の既往を有するはずであったが，高血圧を認識できていない患者が1/3を超えていた。

結 語

抗血栓薬の服用が脳内出血入院患者の27例（21%）に認められ，抗血栓薬と頭蓋内出血とに関連が疑われた。

脳内出血入院患者の37%は，高血圧症の認識がなく，発症予防のためにさらなる啓蒙が必要と思われた。

文 献

- 1) Toyoda K, Yasaka M, Iwade K et al: Dual anti-thrombotic therapy increases severe bleeding events in patients with stroke and cardiovascular disease: a prospective, multicenter, observational study. Stroke 39:1740-1745, 2008
- 2) 豊田一則，矢坂正弘，長田 乾，他：抗血栓療法中に発症した脳出血の臨床的特徴 多施設共同後ろ向き研究. 脳卒中 28:539-543, 2006

Background research in patients with intracerebral hemorrhage admitted to our hospital in 2008

Kuka ISHIOKA¹⁾, Kanako NAKAUCHI¹⁾, Soichiro HENMI¹⁾, Tetsuya TAMURA¹⁾, Hirohumi OKA¹⁾, Hajimu MIYAKE¹⁾, Koichi SATO²⁾, Mami HANAOKA²⁾

1) Division of Neurosurgery, Tokushima Red Cross Hospital

2) Division of Endovascular Therapy, Tokushima Red Cross Hospital

We treated 627 cases of cerebral vascular disease (ischemic stroke : 378 patients, intracerebral hematoma : 127 cases, cerebral aneurysm and subarachnoid hemorrhage : 113 cases, and vascular malformations : 9 cases). We studied the background of hypertensive intracerebral hematoma (HICH) patients. The age distribution of HICH patients was 36-98 years (mean : 73.0), and sex distribution was 77 : 50 (men : 61%). The prevalence of heart disease, diabetes mellitus, and hypertension (principal family history) was 21%, 20%, and 63%, respectively. In addition, the recurrence rate of HICH was 13%, and the history of ischemic stroke was noted in 16% of HICH patients.

Of these 127 HICH patients, 27 (21%) received antithrombotic or antiplatelet drugs at the onset of intracerebral hemorrhage (single antiplatelet drugs : 16%, 2 antiplatelet drugs : 1%, 3 antiplatelet drugs : 1%, and anticoagulants only : 4%, combination of anticoagulant and antiplatelet drugs : 2%). With regard to hematoma size, hematoma location, and outcomes, we compared the effect of administration of antiplatelet drugs in 25 HICH patients with that of administration of non-antiplatelet-anticoagulant drugs in 100 HICH patients.

Key words: intracerebral hemorrhage, antiplatelet therapy, anticoagulation

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 16:12-15, 2011
